

[特別活動]

子どもが安心して自信をもって過ごせる学級を目指して

－「クラス会議」を中核に据えた学級指導を通して－

高山 史*

1 はじめに

(1) 問題

文部科学省の「平成25年度の児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によれば、公立小学校におけるいじめの発生した学校数は、10,231校（全学校数に占める割合、51.1%）、いじめの発生件数は118,748件である。半数以上の学校内でいじめが発生している現状を踏まえると、教室が子どもたちにとって安心できる場所になっているとは言い難い。

また、学校には、自尊感情が低く、自信をもてずに不安そうにしている子どもが少なくない。内閣府の「平成25年度の我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」によれば、「自分自身に満足していますか。」の質問に対して、満足していると答えたのは、45.8%であり、諸外国の平均79.7%と比べて、極めて低い。調査の分析によると、子どもたちの自分への満足感は、「自分は他者にとってどうであるか?」といった対他的な自己認識の要因による影響を受けており、家庭生活や学校生活での人間関係の影響を特に受けやすい。よって、学校生活の中で子どもたちの自尊感情を高めるには、他者から自分は認められているという感覚（以降、自己有用感とする）を教育活動全体を通して高めていくことが必要である。

(2) 子どもの実態

上記の現状を踏まえたうえで、本学級の実態について述べる。本学級は小学校2年生、男子11名、女子13名の計24名の学級である。1年生の頃から同じメンバーで、「友だちに殴られた」「バカと言われた」などのトラブルが頻発していた。トラブルが起こるたびに、担任に話をして解決してもらうことを考える子どもが多かった。周りの子どもはトラブルが起きても関わろうとせず、まるでそのトラブルが近くで起きていないかのように過ごす傾向もあった。

また、授業で友だちが課題解決をやり遂げたり、何らかの成功体験をしたりする場面であっても、声を掛け合ったり、認め合ったりすることが少なく、他者に対して関心がない様子も見られた。こうした実態から、本学級も教室の中で「安心感」と「自己有用感」が低いことが分かった。この現状を打破する為に、以下の具体的方策を立てた。

(3) 具体的方策

安心感と自己有用感を高めるためには、学級内に「ルール」と「リレーション」が確立されている必要があると考える。川村（2010）はルールを「集団内に、規律、共有された行動様式があること」、リレーションを「集団内に、児童生徒同士の間で良好な人間関係、役割交流だけではなく感情交流も含まれた内面的なかかわりを含む親和的な人間関係があること」としている。両方を達成するための方策として、赤坂（2003）の提案する「アドラー心理学に基づくクラス会議プログラム」に注目した。「クラス会議」とは、子どもたちが自分たちで話し合い、学級の問題や個人の問題を解決していく会議である。

赤坂（2014）は、クラス会議に「ルールの定着」と「認め合う人間形成」の可能性を挙げ、数多くの実践結果をもとにその有効性を明らかにしている。また、諸富（2015）は、クラス会議の魅力に「ルール」と「リレーション」のある学級が育つと述べている。赤坂や諸富の見解より、クラス会議は、本学級の課題である「安心感」と「自己有用感」を高めることに適応していることが分かる。そこで、森重（2015）の低学年での実践研究も踏まえ、本学級の発達段階に合うように「クラス会議プログラム」を組み直し、本学級の課題解決を目指して「クラス会議」を中核に据えた学級指導を試みた。

* 長岡市立神田小学校

2 研究の目的と方法

本研究では、クラス会議プログラムを目の前の子どもの実態を基に修正しながら実践する。クラス会議を中心として学級経営を進めることにより、子どもが教室に安心感をもち、自己有用感を高めていくことを明らかにしていく。有効性については、「学級満足度アンケート」（以下「Q-U調査」）結果、行動観察や子どもや保護者の書いた感想やメモに基づいて考察をしていく。

3 実践と考察

本実践では、4時間の「クラス会議プログラム」を構成し、指導する。（図1）その後、週に1度クラス会議の時間を継続して実践していく。なお、子どもたちにとって切実で緊急を要する問題があれば、日を置かずその日の朝の時間を利用して即時クラス会議を行う。また、低学年であるという本学級の実態も踏まえ、4時間の指導を丁寧に行っていく。

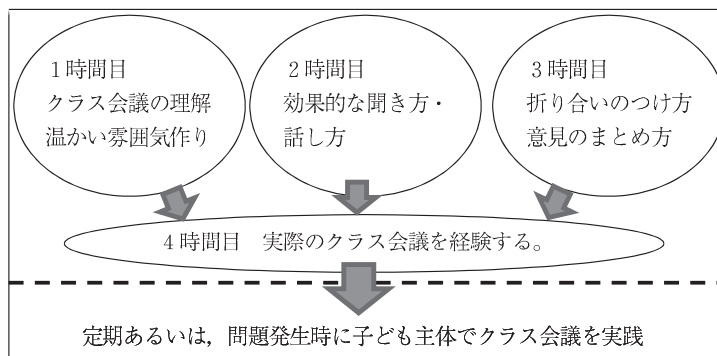


図1 実践した「クラス会議プログラム」の構想

以下は、「クラス会議プログラム」の4時間の実践と考察である。

(1) 輪になって「いい気分・感謝・認めたい」（第1時間目）

いきなり話し合いをさせるのは、経験していない子どもたちにとって難しい。また、新しい活動に抵抗を示す子どもも少なくない。そこで、初めての段階では、クラス会議の目的を理解したり、友だちの言動で「いい気分になったこと」「感謝したいこと」「認めたいこと」を発表したりする場を設定した。

① 概要

1時間目の流れは以下のとおりである。

内容	概要 及び 留意点
クラス会議の目的を共有する	教師が一方的にクラス会議を提案するのではなく、「クラスで楽しいことや問題がある時、先生や大人に解決してもらおうと自分たちで解決できるようになると、どちらがいい?」「どう?やってみる?」などと問いかけるように話を進め、子どもから「やってみるといいかも」という気持ちが高まるようにした。
全員で輪の隊形をつくる	協力して何か一つのことを達成する活動の第一歩として、「素早く、静かに、相手に思いやりを持って」輪の隊形をつくるようにした。輪の隊形の作り方は例示を示し、丁寧に説明をした。1回目のタイムを計り、子どもたちに伝え、納得しなかったらもう1回話し合い、2回目を行うようにした。
いい気分・感謝・認めたい	クラス会議を進めるには、温かい雰囲気で進めることが大切だと伝える。温かい雰囲気を作るために、友だちに「いい気分になったこと」や「感謝したいこと」、「認めたいこと」を言い合う時間を提案した。本活動を、言えない子どもが苦しい思いをしないように「言えない時はパスをすることができること」「パスをしてももう一度チャンスがあること」をルールとした。

② 実際

まず、「クラス会議の目的を共有する」では、8割の子どもが、「楽しいことや問題がある時は自分たちで話し合っ解決したい」と答えた。残りの子どもたちは、どちらにも手が挙げられず、自分たちで解決したいが、クラス会議を進めることに不安があると話した。

次に、「全員で輪の隊形をつくる」では、初めて輪を作らせると3分30秒かかった。友だちとぶつかりそうになったり、「どけよ」と文句を言ったりする子どもがいた。子どもたちの希望でもう一度挑戦することにした。作戦を立てたいと子どもが言い、「終わった人から、手伝いをしたらいい」「静かにするけど、アドバイスはあった方がいい」「どけとか言わない」と作戦を立てた。2回目は、自分たちで決めた作戦をもとに素早く動いた。「私の横空いているよ」「A君、私の横に来ない」など、まだ入っていない子どもを思いやる言動も見られた。時間は1分45秒であった。「みんな話したから上手くいった」と子ども達が喜んで話す姿から、友だちと話し合い、解決していくことの良さに気付くきっかけを与えることができたのではないかと考える。

最後に「いい気分・感謝・認めたい」では、最初に考える時間を1分設定した。初めてであったため、子どもたちは慎重に考えている様子であった。

発表では、下記のような意見が出た。

- ・ Aさんが、目を見て「おはよう」と言ってくれて嬉しかった。(同様の意見 3人)
- ・ B君、一緒に遊ぼうとドッジボールに誘ってくれてありがとう。(同 6人)
- ・ 給食の時、私がこぼした時に、みんなが手伝ってくれました。ありがとう。
- ・ Cさんが係の仕事を頑張っていていいなと思いました。(同 4人)
- ・ お楽しみ係がいつも、昼休みの遊びを考えていてすごいなと思いました。(同 4人)
- ・ パスします。(同 5人)

パスした子どもは、日頃の授業から発表を苦手とする子どもたちであった。事前にパスが可能であるというルールを示してあったため、「パスします」の一言だけでも言えた。子どもたちはこの時間を、褒められて嬉しかったと言ったり、みんながきちんと発表できたと友だちを認めたりしていて、クラス会議の土台となる温かい雰囲気を作ることができたと考える。

(2) 「効果的な聞き方・話し方で解決を目指す」(第2時間目)

森重(2015)は、クラス会議を実践していく上で安心・安全な場をつくる必要性を述べている。安心・安全な場を保証するには、人を傷つけない話し方と話を受容的に聞く雰囲気を作りたい。そこで、2時間目には、話し方・聞き方についてロールプレイし、話し合うためのクラスの約束を決める場を設定した。

① 概要

2時間目の流れは以下のとおりである。

内容	概要 及び 留意点
傷つける聞き方と受容的な聞き方を体験しよう	ペアで聞き役と話し役の二手に分かれる。話し手は、「自分の楽しかったこと」を話す。聞き役は、1セット目に「話に頷かない」「つまらなそうに」など反応を示さない聞き方を行う。終了後、聞き役と話し役で感想を交流し合い、2セット目を行う。2セット目は、「話に頷く」「一生懸命に」など興味をもった聞き方を行う。2セット目終了後、聞き役と話し役で感想を交流し合う。2セットが終了したら、役を交代し同じように繰り返し、違いを実感させる。
場面絵を見て、どんな気持ちになるか体験しよう	強い口調で反対意見を言っている場面を見せる。実際に場面絵と同じようにペアでロールプレイをし、反対意見を言われた人の気持ちを発表する。どんな言い方をすれば友だちを傷つけないか話し合わせ、発表させる。以上の流れを「一方的に攻められている場面」や「多人数で一人に文句を言う場面」など他の場面についても同様に行う。
クラスの聞き方と話し方の約束を決めよう	以上の2つの体験の後、子どもたちにクラスでの聞き方、話し方の約束を話し合わせる。子どもたちから出てきた意見はすべて肯定的に受け止めていく。子どもたちの意見が発散した後で、どれを大事にしていくか子どもたち自身に問いかけ、集約していく。

② 実際

傷つける聞き方では、「話を聞いてもらえないと話すことが途中からできなくなった」「話を聞かないようにするのは、相手に悪い気がした」と感想が出た。反対に、受容的な聞き方の後では、「聞いてくれているっていうのが分かる、どんどん話したいという気持ちがわいてきた」「一生懸命聞こうとすると、話している人も話を盛り上げてくれておもしろかった」と感想が出た。感じ方の差から、受容的に話を聞くことは、相手も自分もいい気分話し合うことが実感できたと考える。

話し方の学習では、「場面絵のような経験があり、嫌な気持ちになった」と発言する子どもがいた。「強い口調や人が傷つくような話し方をするのは良くない」という意見が出る一方で、「悪気がないけれど、つい使ってしまう時はどうしたらいいか」という質問も出た。場面絵を見せたことは、子どもたちに話し方の問題意識をもたせることに有効であったと考える。

最後に、聞き方と話し方の約束を話し合わせた。話し合いで決まったことは以下の通りである。

- ・ 友だちが話しているときは、一生懸命聞く。
- ・ 意見に反対するときは、いいところを言ってから言う。
- ・ 傷つける言い方をしてしまったときは、素直にごめんと言う。

感想を聞くと、「自分たちで決めたことだからやらなきゃと思う」「この約束が守れたら気持ちよさそう」と肯定的な意見が多かった。反対に、「守れなかったときのことが怖い」と呟いている児童がいた。その児童には、「できたかできていないかではなく、約束を意識することが大事である」とフォローを入れた。少しでも話し合いに不安を感じた児童

がいた場合、的確に指導することも必要であると考えた。

(3) 「グループで一つの意見を決めよう」(第3時間目)

話し合いをすると、意見は複数出てくる。クラス会議では、複数の意見を合意形成していくことや決定していくまでの過程も大事にしていきたい。しかし、合意形成したり、自分たちで意見を決定したりする経験が本学級の子どもたちには少ない。また、低学年であるという実態を踏まえると、最初から全員で話し合うことは困難である。そこで、小集団による話し合いを通して、経験を積ませることにした。また、小集団での話し合いには、ホワイトボードミーティングを取り入れた。ホワイトボードミーティングとは、ちょん(2014)が開発した一人ひとりの力が生かされる効果的な話し合い技法のひとつである。近藤(2014)はクラス会議の形態を変え、ホワイトボードを活用する方法を提案しており、実践を試みた。

① 概要

内容	概要 及び 留意点
ブレインストーミングでホワイトボードに意見を書きだそう(発散)	まず、4人1組でグループを作る。次にブレインストーミングについて、説明をする。ブレインストーミングとは、思いついたことをできるだけたくさん意見を出し合う事である。人の意見をよく聞く事、出た意見について、批判をしないことをルールとして行う。 今回の話し合いは、ホワイトボードを置き、発言しながら意見を書きだすことにした。書きだすことで、話し合ったことの記録が残り、話し合いを進めていくための手掛かりとしていく。
良い所や気に入ったところに目を向けよう	次に、グループで相談をし、出た意見の中から良いところや気に入ったところに印をつけた。印をつけることで、グループ内での共通点を可視化し、合意形成する際の手掛かりとなる。
意見を一つに集約しよう(収束)	最後に、出た意見をまとめていく。子どもたちには、3つの方法を提示した。1つ目は、出た意見の中から選ぶ方法。2つ目は、出た意見をつなげる方法。3つ目は出た意見の間を取る新しい意見を出す方法。どの方法をとっても良いが、グループ全員で決めたという事実を大事にさせるようにした。

② 実際

今回は「グループの名前をつけよう」というテーマで話し合わせた。初めて取り組むブレインストーミングについて、戸惑いながら意見を出す子どもが多く、話し合いがなかなか進まない様子が見られた。話し合いが停滞しているところには「どんなことでもいいから、思いついたことはどんどん書き出してごらん」、「いいね。その調子でどんどん意見書いていこう。」と声を掛けながら、机間巡視をした。始めて5分程たつと、話し合いが盛り上がり、書き出される意見の量も増えていった。意見には「なかよし」や「チーム」などのつながりを求める意見が多かった。誰かが傷つくような意見が書いてあった場合は、指導する予定でいたが、傷つく言葉を書いたグループはなかった。

「良いところや気に入ったところに目を向けよう」では、どのグループも暖かい雰囲気です話し合いを進めることができた。一部のグループでは、印を付けすぎて、困っている様子が見られたが、児童Dが「この中からお気に入りを決めていったらいいんじゃない」と言い、みんなが納得し、良いところ精選していく様子が見られた。

最後の「意見を一つに集約しよう」では、どのグループも難しそうに話し合っていた。あるグループは「優しい」と「助け合う」というフレーズをどのようにまとめるかを、悩んでいた。児童Eが「優しいと助け合うができる人ってヒーローっばいから五班ヒーローズにしたらいいんじゃない」と意見を出し、周りも「それ、いいね」と認め、互いに嬉しそうにしながら意見がまとまった。

(4) 「クラス会議に挑戦！」(第4時間目)

1～3時間目で作り上げた土台を活かし、クラス会議を行った。本時間は、初めてであるため、担任が司会をした。

① 概要

内容	概要 及び 留意点
いい気分・感謝・認めたい	1時間目から継続している活動をクラス会議の流れに取り入れることにした。基本的には、隣の人を褒めることにしているが、子どもたちの様子に合わせて、伝える人をくじ引きにするなどの条件を変えて行うこともあった。
クラス会議のルールの確認	2時間目に子どもたちで決めた「友だちが話しているときは、一生懸命聞く。」「意見に反対するときは、いいところを言ってから言う。」「傷つける言い方をしてしまったときは、素直にごめんと言う。」のルールを復唱する時間を設定した。話し合い前に確認することで、安心して話し合う環境を整えることができる。

議題についての話し合い	事前に集めた議題の中から話し合うことを発表する。議題についての解決策を1分で考える。ブレインストーミングで輪番に解決策を発表する。意見が出尽くしたら、質問や意見を聞く。質問や意見後は、解決策を決める。決め方は、「提案者が選ぶ」「みんなが納得するまで話し合う」の2つから選ぶようにした。「時間になったら多数決する」という最終手段も示した。担任は、相手を傷つけない言い方がどうかと話し合い中の子どもの良さに注目し、観察する。
担任から一言	子どもたちの話し合いの様子で良かったことや嬉しかったことを伝える。クラス会議をやってよかったという実感を子どもたちがもてるように配慮する。

② 実際

「いい気分・感謝・認めたい」の時間では、継続して行っており、「Fさんが朝、学校に来た時に進んで掃き掃除をしていました。気持ちよく教室に入れました。ありがとう。」「G君が、Hさんのあいさつを聞いていて、今の挨拶すごくいいねと言っていたのがとてもいいなと思いました」と具体的になり、かつ友だちのことをよく見ている発言が増えた。友だちの良さを認めようとする温かい気持ちが育ってきた証拠であると捉えられる。話し合いでは、「学級の名前を付けよう」を議題にした。初めのブレインストーミングでは、下記のような意見が出た。

・にっこり	・パワフル	・スマイル	・きらきら	・ヒーロー	・なかよし	・にこにこ
・ハッピー	・いい子	・2年2組	・さいこう	・げんき	・笑顔	

解決策をしぼる時間では、「『にっこり』と『にこにこ』はどっちもいい言葉だと思うけれど、意味が同じだから、まとめた方がいいんじゃない。」、「2年2組だっていうのが分かるようにしたい」という意見が出た。友だちが傷つかなないように意見を言っており、2時間目の「効果的な話し方」が生きていた。

一度、多数決をとってみたいと子どもたちが発言したため、多数決をとった。結果は下記のとおりである。

・にっこり(1)	・スマイル(6)	・きらきら(2)	・ヒーロー(1)	・なかよし(2)
・にこにこ(5)	・ハッピー(1)	・2年2組(3)	・笑顔(3)	(残りの意見は全て0)

多数決を受けて、「スマイル」と「にこにこ」は入れたいという方向に話が進んだ。児童1が「『にこにこ』を『2こ2こ』にしたら2年2組っぽくなるんじゃない。」の発言にみんなが「それ、いいね。」と賛同した。クラス会議を通して、クラスがひとつにまとまった瞬間であった。その後、意見は「2こ2こスマイル」に決定した。終了後の感想では、「みんなで名前を決めるのが面白かった。」「意見を言うのはいつも緊張するけど、今日は分からないけれど言えた。」「みんなが自分の意見を『いいね』と言ってくれて嬉しかった。」と肯定的な意見が見られた。クラス会議が子どもたちのつながりを作り、クラスに安心感を与えるのに有効であったと考える。

4 成果と今後の課題

(1) 子どもの変容から

冒頭にも述べたように、本学級の年度初めは、友人関係の小さなトラブルが頻発し、トラブルが起こるたびに担任に話をして解決してもらおうとする児童が多かった。しかし、クラス会議を導入して3ヶ月が経つと、トラブルの数が減少した。ルールが定着し、学級の安心感が高まったためと捉える。また、トラブルが起こったときには、周りの子どもが間に入り仲介するようになった。それでも解決できない時には、「クラス会議でみんなに相談してみたら」と声をかけ、クラスで解決を図るなど自分たちの問題を自分たちで解決しようとするようになった。このように問題が起こったとき、友達に自分事として捉えてもらえる経験は、子どもたちに安心感を与える。また、友達から認められているという自己有用感を生む。こうした子どもの変容から、今回実践した「クラス会議プログラム」には有効性が認められることが分かる。

課題として、クラス会議が強い抑止力になってしまう危険性を感じた。なぜなら、問題行動を起こした子どもに対し、「今の問題、クラス会議の議題にするよ」というような発言を耳にしたからである。実践していて、クラス会議の良さは温かさであると考えている。しかし、クラス会議という活動が子どもたちの恐れになってしまえば、活動の良さが半減してしまう。クラス会議を実践するからこそ、その後の子どもの言動に注意を向け、クラス会議は温かい活動だということを伝えていく。

(2) Q-U調査の結果から

図2の様子は5月のクラスの実態、図3は11月のクラスの実態である。川村(2012)によると、図2は「ルール」と「リレーション」の確率が低い、荒れ初め型であり、図3は、「ルール」と「リレーション」が確立され始めてきた、

満足型の集団に近づいている様子である。数値では、学級生活不満足群が41.7%から20.8%に減少し、学級生活満足群が29.2%から58.3%に上昇した。数値評価から見ると、クラス会議を中核とした学級指導が、子どもたちの安心感と自己有用感を育むことに有効であったと考えられる。

しかし、学級不満足群要支援群の児童Dが1人いる。この児童は、特別支援学級に通級しており、クラス会議時に本学級ではなく、特別支援学級にいることが多かった。他の友達が盛り上がっているところに入り込むことができず、孤立感をもってしまったと考える。

通級児童を含めた全員が参加できるよう、特別支援学級担任の理解を得て、クラス会議を進めていくことが課題である。

(3) 家庭からのコメントなどから

クラス会議を進めて6ヶ月が経った頃、保護者から連絡帳にコメントが届いた。内容は以下である。

「2こ2こスマイル会議」(クラス会議)の効き目があったようで、我が家でも「〇〇家会議」を開き、意見を出しあい、決まりを作って掲示しています。いつも口うるさく私が言っていたことを、掲示を見て、自ら気付く機会が増えてくれると嬉しいです。

「2こ2こスマイル会議」(クラス会議)の効き目があったようで、我が家でも「〇〇家会議」を開き、意見を出しあい、決まりを作って掲示しています。いつも口うるさく私が言っていたことを、掲示を見て、自ら気付く機会が増えてくれると嬉しいです。

クラス会議の良さを子どもが実感し、家庭にも広げた例である。

保護者との面談や会話の内容からもクラス会議によって子どもの言動が変容していることが分かる。問題行動が多かった子どもの保護者が、家庭で暴言を言うことが少なくなったと嬉しそうに話していた。また、子どもがクラス会議の様子を家庭で嬉しそうに報告してくれると話す保護者もいた。子どもたちが、クラス会議の良さを実感し、安心感と自己有用感を高めながら、自らを振り返り言動を変えていったと捉える。クラス会議の実践は学級にとどまらず、子どもたちの家庭生活やコミュニケーション能力・生き方の確立にもプラスの影響を与えていくことも期待される。

5 最後に

本研究を通して、クラス会議を中核に据えた学級指導は、子どもの安心感と自己有用感を高めることに有効な手立てであることが分かった。しかし、課題として挙げたように、クラス会議後の子どもの言動を注視し、クラス会議の負の影響を排除する支援をすること、保護者や校内の職員などの理解を得ながら実践を継続することでより多くの子どもの安心感と自己有用感を高めることが可能になると考える。今後も、学級に子ども一人一人に居場所があり、自尊感情を育みながら成長していく学級づくりを目指して、クラス会議の実践を続けていきたい。

参考・引用文献

- 1) 文部科学省, 2013, 「平成25年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」
- 2) 内閣府, 2013, 「平成25年度我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」
- 3) 赤坂真二, 2003, 『アドラー心理学に基づくクラス会議の効果の研究』, 上越教育大学修士論文, 未公開
- 4) 川村茂雄, 2010, 『学級集団づくりのゼロ段階』, 図書文化
- 5) 諸富祥彦(監修), 森重裕二(著), 2015, 『1日15分で学級が変わる! クラス会議パーフェクトガイド』, 明治図書
- 6) ちょんせいこ, 2014, 『ホワイトボードで学級が変わる!! 話し合い活動ステップアッププラン』, 小学館
- 7) 赤坂真二(編著), 近藤佳織(共著), 2014, 『いまクラス会議がすごい!』, 学陽書房

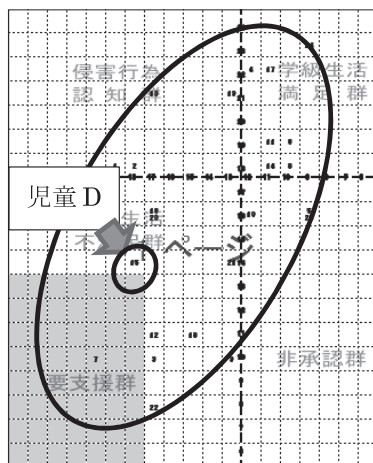


図2 5月のQ-U調査結果

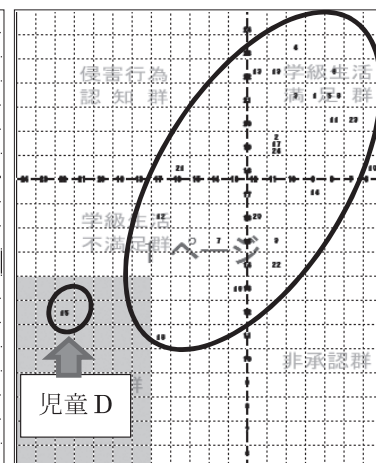


図3 11月のQ-U調査結果